
アンバランスワールド FILE.1 「スキルアップガム」

9179Whiter

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アンバランスワールド FILE・1 「スキルアップガム」

【Zコード】

N4105F

【作者名】

9179Whiter

【あらすじ】

バイト先に好きな人ができた普通の青年。ただその青年は自分に自信が持てずにその子にアピールすらできなかつた。そんなある日、ネットでとある記事を見つけ・・・。

(前書き)

バイト先に好きな人ができた普通の青年。ただその青年は自分に自信が持てずにその子にアピールすらできなかつた。そんなある日、ネットでとある記事を見つけ・・・。

僕はタクヤ。26歳フリーターだ。

突然だが僕は最近「恋」をした。それは最近始めたバイト先にいる女の子ミサキさんだ。

見た目も可愛く、仕事もよくできる。

そして僕が惚れてしまったのはミサキさんの笑顔だった。

つい自分も笑顔になつてしまつような・・・。

なんだか気分が朗らかになつて、優しい気持ちになれるような・・・。

ただ、引っ込み思案な僕にとつては「告白」なんてもつてのほか、まだ話しかけることすらためらつていて。

僕は外見・性格・頭・力、どれをとつても至つて普通の人間で、とてもミサキさんに似合いそうな人じゃないことは自分でも痛いほどわかつていた。

だからこそ、自信がない・・・。

そんなことを時折考えつつ毎日を過ごしていた。

ある日、僕は独り言を言いながらボーッとパソコンをいじつていた。

「へえ～、また芸能人の結婚の話題か。まあ、最近は美男美女カッフルだのいろいろといつるさい世の中になつたもんだよ・・・。」

するとあるページに目をやつた。

「なになに『このガムを使えばあなた自身の嫌いなところ、自信がないところをすべてカヴァーできます。ルックス・肌質・肉体などに自信のない方はこの『外見スキルアップガム』を、性格・頭脳・筋肉などに自信のない方はこの『内面スキルアップガム』をお使いください。効果は2週間ほど続きます!』ふう〜ん、ほんとかねえ?」

半信半疑でページに目をやつていった。

すると「現在、お試しモニター募集中!当選者のモニターの方々には直接好きな方のガムをお届けします。」と書いてあることに気づいた。

「まあ、ただなら応募してみるだけしてみるか・・・。」

とりあえず、外見が変わったらややこしくなりうるうので「内面スキルアップガム」の方を応募することにしてみた。

「こんなものに頼ろうとする自分が情けないな・・・。」

そのため息をつきながら応募した。

そして、1週間後。

すっかり、応募したガムのことを忘れかけてたそのころ、謎の荷物が届いた。

中を見てみると一通の手紙が。

「おめでとうござります!厳正なる抽選の結果、当選とさせていただきます。あなたの『応募した『内面スキルアップガム』をお送りいたします。詳しい使い方については商品に同封してある説明書を

お読みください。」

「まさか、本当に当たるとは・・・。自分でこんなに運が良かつたなんて・・・。」

驚きと喜びを抑えつつ、すぐに中に入っている商品を見てみた。長方形の箱に4種類の丸いガムが入っていた。そして早速説明書を読んでみた。

「この『内面スキルアップガム』には4種類の内面状のスキルを上げる効果のあるガムが入っています。それぞれの効果の持続時間は約2週間。使い方は以下をお読みください。

- 1・まず使いたいガムを口に入れ味がなくなるまでよく噛みます。
 - 2・次に、よく噛んだガムを膨らます。
 - 3・するとある程度膨らむと割れるので、後はガムを口から出して銀紙に包んで捨ててください。
 - 4・これで2週間は効果が続きます。なお、効果は途中では消せないのでご了承ください。
- もし、不都合などがあった場合は『報告してくれたらありがたいです。』

「なるほど、この4種類のガムを使えば内面が変化できるのか・・・。そうだ、これで自分のイメージチエンジをしてミサキさんにアピールしてみよう!」

僕はそう思つて、左から一つ田のガムを手にした。
そしてそのガムの説明書を読んでみた。

「このガムは『筋力ガム』です。これを食べれば2週間ずっと強い筋力を發揮できます!」

「まう、筋力をアップできるのか。まずはこれをためしてみるか。」

そう思いながら、濃い情熱的な赤色のそのガムを噛み、膨らました。そして「パチンッ！-！」とゴムが切れたような少し大きな音が鳴つた。

ガムを口から出してみると、やつきの赤色はすっかり落ちていた。気づいたら体中に力がみなぎつてこくのをひしひしと感じた。

「おおっ、なんだか無性に動きたくなつてきただぞ！」

すぐにバイト先へと向かつた。

いつものように雑用をさせられたが、今回はいつもとは違つ。

「おおっ、とても体が動くし、それに全く疲れない！」

いつもは1時間かかる雑用も今日はたつたの10分で終わつた。当然ながらみんなは驚き、一部からは尊敬のまなざしも感じる。

「うーん、力があるつて最高！-！」

僕は心の中でうるんだ。

仕事つぶりではサキさんからも感心されるようになり気分は上々だつた。

おかげでサキさんとも話すようになつてきただが話すのはすべて仕事関係のことばかり・・・。

「これじゃアピールはできても、仕事以上の付き合はなんてもつてのほかだ・・・。」

そう感じつつも精力的に仕事を続けて2週間後。

すっかりガムの効果のおかげだということを忘れて働いていると重い荷物を運んでいるとき、急に力が入らなくなつたことに気づいた。

しかし、時すでに遅し。

落としそうになつたのを必死にこらえようとしたその時「グキッ！」
「！」っと

辺りにも確実に響いたような音が周りに鳴り響いた。

そう、「思いつきり」腰をやってしまった。

すぐに病院に運ばれ、3日間の入院を余儀なくされた。

そして、3日後腰の痛みをすっかり落ちつき退院。
すぐに家に戻り、2つ目のガムに目をやつた。

「ふう～、すっかりガムの効果が2週間で切れることを忘れてた。死ぬかと思った・・・。」

そう思いつつ、2つ目のガムの包みを開けると今度はエネルギーがシユな黄色い色をしていた。

「このガムは『健康ガム』です。これを食べれば2週間ずっと健康優良児の状態を維持し続けれます！」

「んな、健康になつたってなんの意味もないよ～な・・・。」

そう思いつつも一応ガムを食べてみた。

「パチンツツ……」今度も部屋中に響くような音をたててガムが割れた。

「よしつ、今日からまたバイトをがんばるかー。」

そう意気込んで仕事場にいった。

もちろん、ミサキさんや周りからは心配の声をかけてもらつたが「大丈夫ですよ。」と軽く笑いながら答えた。

今度は力仕事じゃなくて普通の仕事をやるようになつた。

「これなら、周りの人からは腰をやつしたことで力仕事をやらなくなつたと思われているだろつ。さすがにガムの効果が切れたことは誰もわかるまい。」

そう思いつつ、仕事をこなした。

そしてガムの効果が続いてから1週間後。

突然、風邪がバイト先を中心に流行り始めた。

周りのバイト仲間の人たちはどんどんその風邪による体調不良で休んでいった。

とうとう次の日には自分とミサキさんと他数名しかバイトに来なくなつた。

店長も風邪をこじりてしまつたようなので、その日のバイトは休みになり、

風邪をひいていない僕とミサキさんとバイト仲間と一緒にお昼を食べた。

「まさか、ここまで風邪が流行るとはね……。」

「オレも若干のどに違和感を感じるよ。」

「しかし、ミサキさんとタクヤは最近すいぶん元気だな。」

すると僕とミサキさんは答えた

「いやー、僕はなんだか最近健康体で。すごぶる元気だよ!」

「私も最近健康体だよ! 夜更かしあつた次の日も体が軽いし。」

それを聞いてバイト仲間の一人が冗談まじりで言つた。

「いやー、一人はまさに『健康体カツブル』だな!」

そう言われて僕は顔を赤くしながら

「そ、そんな・・・。カツブルだなんて・・・。」

と言つて、みんなで笑つた。

その後家に帰るとさつきのことを思い出した。

「カツブルか・・・、そんなの言われたの初めてだなあ。」

と少しばかり自分に自信を持ち始めるようになつてきただことを実感してきた。

そしてさらに1週間後経つと、風邪は嘘みたいに落ち着いて

みんなは普通どおりバイトに復活してきた。

それと同時にガムの効果も切れた。

そしてバイトが終わり帰ると、早速3つ目のガムに目をやつた。

「よし、次のガムにも期待してみよう。」

そう言いながらガムの包みを開いた。

今度は落ち着きのある青色のガムだった。

「このガムは『頭脳ガム』です。これを食べれば2週間ずっとIQ180の超頭脳の持ち主となれます!」

「へえ、頭が良くなれるのか。でもうちのバイトは頭をあまり使わないタイプだからな・・・。」

そう思いつつガムを嚥んだ

「パチンッッ!」とまた今回も爽やかな音を鳴らして割れた。

次の日、早速僕はバイトに行つた。

もちろん頭を發揮するような仕事は特になく、

今日ももの運びやらをやつていた。

しかし、1週間後。商品の仕入れであるトラブルが生じた。

どうやら入荷する商品の値段が間違っていたらしい。

しかも今回はいつも以上に多くの種類のものを大量に入荷するためとてもすべての金額を計算する余裕なんてなかつた。

店長は慌てふためきながら「誰か、助けてくれ!」と
神頼みに近いことを叫び始めた。

すると僕は何かにとりつかれたかのようにその入荷一覧表に目を通し
すぐに紙にペンで様々な計算式を書き始めた。

周りの人や店長はあつけをとられたかのように僕のほうを見た。

そして10分後。僕はペンを置き、店長などに指示を出した。

「この商品は 田で次の商品は 田です！ 業者様にこの連絡をお願いします。次に・・・。」

店長はふとわれにかえり、僕の指示通りに周りのバイトたちと行動した。

そして、無事すべての商品の入荷が終わった。

「いやー、君のおかげで今日は一命を取り留めたよ。本当にありがとうございますー。わあ、みんなも彼に拍手を送るんだ！」

その店長の掲示で僕はみんなから憤りしげもない拍手をもらつた。

もちろん、中井さんも尊敬の目で僕を見ててくれた。

その後も1週間の間は頭がよく働いた。みんなからも「す」「こなー」「頭いい!」といつた言葉をもらいつづけた。もひんと!! カキさんからも。

ただ、ガムの効果が切れた日の夜。

あることに気がいた。

「大分ミサキさんともバイト仲間を通じて親しくはなれた。でもまだ『友達』としてしか付き合えていない。」のままじやずつと気持

ちを伝えきれないままになりつつ……」

そう思つて、次の日最後のガムを手にした。

「「Jのガムにすべてをかけよう!」そしてガムの効果が切れる前に「サキさん」に想いを伝えるんだ!」

そう意気込んで最後のガムの包みを開いた今までで一番平凡な緑色のガムだつた。

「「Jのガムは『感情ガム』です。これを食べれば2週間自分では気づかないような小さな内面の変化が起ります!」

「ずいぶんアバウトな説明だつたな……。でもこれにすべてをたぐれつ!」

そう思つて最後のそのガムを噛んだ。

「パチンッ!」といつものように部屋に音を響かせ割れた。なんだか最後といつともあつてか、どことなくむなしさが残つた。

次の日、覚悟を決めて告白しようとしたが

何回言おうとしてもタイミングが合わず失敗……。

お昼休み。バイト仲間とミサキさんと食事を食べに行つたときバイト仲間がトイレに行つたとき2人きりになれたが何気ない世間話しか出来なかつた。

「「Jのままじや、あつといふ間に2週間経つてしまつ!」

あせつながらおばあさんの日せせかすて終わった。

次の日、バイトが休みで街中をぶらつめながら
「どういつ風に告白しよう……。」と考へてみると
重い荷物を持ったおばあさんが休み休みと歩いているのを
気づいた。

僕は何気に通り過ぎようとして、おばあさんの横を通りすがりようとした
たその時！

自分で「何か」が田覚めだした！
その瞬間僕は無意識におばあさんに

「その荷物お持ちしまじょうか？」

と声をかけた。

おばあさんは「いいですよ」と言しながら断りつとしたが
どうしてもその荷物を持ってあげようといつぱす。

「いえいえ、遠慮なさらず。」

など言しながらおばあさんの荷物を持ってあげた。
そして、おばあさんの家の前行くとおばあさんに

「いやー、本当にありがとうございました。実は本当は誰かの手を借り
りたかったんですよ。これはそのお礼としてもいいですか。」

と言つて、荷物の中からお茶をくれた。

僕は「じゃあ、お言葉に甘えていただきます。」と言つてそのお茶を片手に、おばあさんに別れを告げた。

「いやー、人助けつていいいもんだな！もしかしてこれがあのガムの効き目かな？」

そう思いながら街中で困っている人をほぼ無意識に手助けしていった。

その夜、僕は街中を歩き回った疲れで倒れこむよつに布団に寝転んだ。

そして今日1日のことと思い出した。

「今日はなんかいい1日だつたなー。人助けすることでこんなにいい気分になれるなんて知らなかつた！」

そして次の日もバイト仲間と遊びに行くときも親切心が大いにはたらいた。

電車で座れないお年寄りがいたら席を譲り、点滅の早い信号に困っているお年寄りがいたら手を貸してあげたり・・・。

「正直、自分でもこんなに親切ができるとは知らなかつたなあ。この調子ならばミサキさんに告白できるかも・・・！」

しかし、休みが終わり再びバイトが始まつても、ミサキさんとはバイト仲間を通じて話したり、一緒にお昼を食べるだけでそれ以上は何もない。

そして1日が過ぎ・・・、氣づけば1週間が過ぎ・・・。

その間様々な人に親切心がはたらいたりはしたが
それも全くの無意味だったのかも、と今となつては思つ。

そして、いよいよガムの効果が切れる日となつた。

「どうしよう、このままじゃガムの意味が全くなくなつちやう・・・
。」

慌てながらもその日のバイトに行つた。

仕事をこなしながらもいつ言つか何度も考えた。
でも気づけばバイトが終わる時間に・・・。

「もうこいつなつたらヤケクソだ・・・。」

そう思つて「ちょっと話があるんだけど・・・」ヒサキさんを呼び出した。

そしてミサキさんのほうを見た。

なぜだか今日は不思議ミサキさんの目を見つめながら話ができるそつだ。

多分、いろんな見知らぬ人に親切なことをやつしてきたおかげかもしれない。

そして僕は言った。

「//、ミサキさん。ほ、僕は前からあなたの方が好きでした!!
もしよければ一緒に食事をするとかそんな程度でいいので僕と付き

合ひてください……」

台詞はまつたく考えてなかつた。

もつ思いつく言葉を並べただけだつた。

頭の中にはまつまつ白になつながらミサキさんのまづを見た

ミサキさんはあの笑顔を見させてくれた。

まるで今まで待つていたかのよつ・・・。

そしてから1カ月後。

僕はミサキさんと手をつなぎながら街を歩いていた。

そして笑いながらあの僕の告白についての話題になつた。

「実は私もタクヤさんのことが少し気になつていたの。色々な力仕事をテキパキとこなしていた時や、風邪が流行つたときのこと。それにあのトラブルのときのこととか、そして・・・。」

そこでミサキさんは少し黙つた。

「そして・・・、何?」

「実は1ヶ月ほど前タクヤさんを街中で見かけてね、ちょうどおばあさんの荷物を持ってあげた時だつたの、それで親切にしているのを見てつい気になつちやつて。多分あの時から特にタクヤさんのことを感じになつていたのかも。」

と微笑みながら言った。

僕も思わず

「見てたんですか（汗）あの時はなぜか、あのおばあさんが辛そうに荷物を持っているのが気にかかっちゃって・・・、いてもたってもいられなくなつて持つてあげたんです。急にはたらいた親切心ですかね。」

と少し笑いながら言った。

そんなことを話しながら街の外れまで行つた。

すると道の端の溝にハマつてしまつた車があつた。
中に入も乗つていて

「誰か）、時間がないんだ！早く溝から車を出してくれ〜〜！」

と叫んで助けを呼んでいた。

どうやら中に乗つている人も、車体が大きく傾いているため
下手には動かないみたいだ。

でも、さすがにあの『筋力ガム』がない今は車なんか持ち上げられるわけないし・・・。

「さすがに助けようがないな・・・」

と僕も周りのみんなも思つただろう。

その車の周りの人人が救助を呼ぼうしたらミサキさんがおもむろに

「ちょっとトイレ行ってくるね。待つてね。」

と行つてその場を離れた。

そして2分後ミサキさんが戻ってきた。
するとすぐに車に近づき
車体の下に手をやつた。

するとその瞬間「ガツツー！ガガガ……」と音が鳴り
車が持ち上がった！

僕はもちろん周りの人たちも口をポカーンと開けてその様子を見て
いた。

「ガタンッ！」と車が溝から外れ、車道に戻った。

「いやー、ありがとうお嬢さんー！それにしても凄い力だねー！感謝
するよー！」

と言つてその車は去つていつた。

周りの人は思わず拍手をし、僕もあっけにとられた。

そしてミサキさんのポケットから銀色のガムの包み紙が落ちた。

「なるほど……、風邪が流行つてたときにミサキさんが元気だつ
たのも、今車が持ち上がつたことでわかつたな……。」

• • END • •

(後書き)

今回が僕のデビュー作となります！内容は「世にも奇妙な物語」をイメージした、この世界とはまた別の世界を舞台として書きました（だから「アンバランスワールド」ってなわけで・・・）。これらもこういった作品のアイデアが思いつき次第書いていきたいと思います！コメント・感想などお待ちしています

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4105f/>

アンバランスワールド FILE.1 「スキルアップガム」

2010年12月25日23時38分発行